

三瓶山におけるミヤマホオジロ *Emberiza elegans* の繁殖

星野 由美子*・市橋 直規**

Yellow-throated Bunting (*Emberiza elegans*) Reproduction at the Mt. Sanbe

Yumiko Hoshino and Naoki Ichihashi

1. はじめに

ミヤマホオジロは、冬鳥として日本や台湾に飛来するが、西日本に多く近畿以東では多くない。島根県内でも11月以降には普通に見られる冬鳥である。

繁殖地は、ウスリー・中国北東部および中部・朝鮮半島とされている(五百澤ら, 2014) 国内における繁殖は、1967年5月に長崎県対馬で巣立ち直後の幼鳥5羽が観察された(鴨川, 1968) のが最初であるが、1993年には広島県臥竜山で営巢中の雛4羽が確認された(上野ら, 1995) ほか、同地で1996年5月には営巢中の巣に卵も確認された(上野, 1977)。近年では隠岐諸島の海士町で2015年8月に幼鳥2羽、同年9月に幼鳥1羽、西ノ島町で幼鳥3羽が市橋ら(2016) によって確認されている。

このようにミヤマホオジロの繁殖の可能性が、国内でも散見されていたところ、2014年6月に三瓶山において本種のさえずり姿が撮影された(図1)。そこで、



図1 2014年6月に撮影されたミヤマホオジロの雄
(撮影: 三木敏史氏)

本報告では2015年と2016年に三瓶山で繁殖確認を目的とした調査を実施したので、その結果について報告する。

2. 調査方法

三瓶山において2014年に囀りが確認された地点から、半径1km程度の範囲で調査を実施した。

2015年6月上旬の5日間にコールバック法による調査を行った。コールバック法とは、オスが繁殖期になわばりなどを主張してさえずる習性を利用して、人為的にさえずりをスピーカーなどを用いて流し、その反応を確認する手法である。今回の調査では、晴天日の午前8時15~45分の間に、ミヤマホオジロのさえずりを約15分間スピーカーで流し、それに対する反応の確認を行った。

2016年8月には、隠岐諸島でミヤマホオジロの繁殖が確認された際の情報を参考にし、類似の環境である



図2 標識調査の状況

* 島根県立三瓶自然館, 〒694-0003 島根県大田市三瓶町多根 1121-8

The Shimane Nature Museum of Mt. Sanbe (Sahimel), 1121-8 Tane, Sanbe-cho, Ohda, Shimane, 694-0003, Japan

** 日本鳥類標識協会 〒270-1145 千葉県我孫子市高野山 115 (公財) 山階鳥類研究所鳥類標識センター内

Japan Bird Banding Association, Bird Migration Research Center, 115 Konoyama, Abiko, Chiba, 270-1145, Japan

落葉広葉樹林で、蔓性の植物に覆われている藪の近くに、かすみ網(36メッシュ×12m)を4枚設置し、ミヤマホオジロの囀り音声で誘引して捕獲を試みた(図2)。

捕獲は、鳥類の安全な取り扱いに熟練した鳥類標識調査員が実施した。

幼鳥の種の同定においては、2015年度に西ノ島町および海士町で確認されたミヤマホオジロ幼鳥の画像をもとに判定した。また、年齢はSvensson(1992)による頭骨の骨化指標をもとにして行ったほか、換羽の状況を確認した。また、成鳥の場合には、繁殖を示す指標の一つとして抱卵斑の状態と総排泄口の確認を行った。

捕獲個体は、種類と年齢を判定した後、いずれも測定、撮影後に固有番号が刻印された環境省発行の金属足輪を装着して放鳥した。

3. 結果および考察

2015年6月に実施したコールバック法では、ミヤマホオジロの反応は無かった。

2016年8月2～4日に実施した捕獲調査においては、幼鳥5羽と成鳥1羽を捕獲した。

また、周辺でもミヤマホオジロの地鳴きや、足輪を付けていない個体が複数羽観察された。

今回捕獲したミヤマホオジロの状況は、表1の通りである。幼鳥は、4羽が全身幼羽であった(図3)。また幼鳥の1羽(No.5)は、一部が第1回冬羽への換羽が始まっており、オスと判定できた(図4)。また、成鳥のメス1羽(No.6)(図5)については顕著な抱卵斑が確認できた。

繁殖の確実性については、日本鳥類標識協会の「バンディングによる繁殖指標」(2016)によると、繁殖が確実とされるのは、次のような状況とされている。



図3 ミヤマホオジロの幼鳥(全身幼羽, 性別不明)



図4 ミヤマホオジロの幼鳥
(第1回冬羽へ換羽中, 雄と思われる)



図5 成鳥雌

表1 標識を付したヤマホオジロ

No.	種名	年齢(判定基準)	性(判定基準)	放鳥年月日	抱卵斑	頭骨骨化
1	ミヤマホオジロ	幼鳥(羽衣, 頭骨)	不明	2016.08.02	-	A
2	ミヤマホオジロ	幼鳥(羽衣, 頭骨)	不明	2016.08.03	-	A
3	ミヤマホオジロ	成鳥(羽衣, 頭骨, 抱卵斑)	メス(羽衣, 総排泄口)	2016.08.03	顕著	E
4	ミヤマホオジロ	幼鳥(羽衣, 頭骨)	不明	2016.08.04	-	A
5	ミヤマホオジロ	第1回冬羽(羽衣, 頭骨)	オス(羽衣)	2016.08.04	-	A
6	ミヤマホオジロ	幼鳥(羽衣, 頭骨)	不明	2016.08.04	-	A

- 指標 1. 鳥類標識調査において腹中に卵を触れる雌成鳥を捕獲。
- 指標 2. 鳥類標識調査において顕著な抱卵斑を持つ雌成鳥（場合によっては雄成鳥）を、繁殖期間中の異なった時期に複数回捕獲、もしくは顕著な抱卵斑を持つ個体を複数捕獲。
- 指標 3. 鳥類標識調査において幼綿羽が残る、もしくは全身が幼羽の状態、第一回冬羽への換羽がまだ始まっていない個体を捕獲。

この指標 3. では、スズメ目の鳥類においては、一般的に幼綿羽は巣立ち後すぐに抜け落ち、全身幼羽の状態では、おもに親鳥からの給餌を受けている期間であり、巣の近隣に限られた移動と思われることから、近辺にある巣から巣立った可能性が高く、繁殖は確実であるとされている。

このことから、2016年の繁殖期において三瓶山で捕獲された本種は、指標の3に該当する「全身が幼羽の状態、第一回冬羽への換羽がまだ始まっていない個体」を、4羽捕獲している（No.1,2,4,6）ため、繁殖していたことは確実と考えられる。

しかし、2014年には繁殖期に姿が確認されたが、2015年の繁殖期には姿の確認や情報もなく、実施したコールバック法では本種の反応がなく、生息が確認されていない。2016年に繁殖が確認されたが生息の情報は断続的であることから、本種が三瓶山で、継続的に繁殖しているかは不明である。本種が三瓶山に繁殖地として定着しているかを判断するには、今後の継続的な確認が必要である。

謝 辞

生息情報と画像の提供をいただいた三木敏史氏、調査をご快諾いただいた土地所有者の児玉賢次氏に厚くお礼申し上げます。

引用文献

- 五百澤日丸・山形則男・吉野俊幸 (2014) ミヤマホオジロ. 新訂日本の鳥550山野の鳥:65. 文-総合出版, 東京
- 市橋直規・深谷治・森茂晃・江崎逸郎・岡田美耶 (2016) 隠岐諸島におけるミヤマホオジロ *Emberiza elegans* の繁殖. ホシザキグリーン財団研究報告, 19:195-199.
- 鴨川誠 (1968) ミヤマホオジロの繁殖確認. 野鳥, 33 (2):12. 日本野鳥の会
- 日本標識協会評議員会 (2016) バンディングによる繁殖指標について. バンダーニュース, 59:17-19.
- Svensson L (1992) *Identification Guide to European Passerines, fourth, revised and enlarged edition*. Published by the author, Stockholm
- 上野吉雄・杉島洋・保井浩 (1995) 中国山地におけるミヤマホオジロ *Emberiza elegans* の本州初の繁殖. 日本鳥学会誌, 44 (4):229-230.
- 上野吉雄・河津功・保井浩 (1997) 広島県芸北町臥竜山におけるミヤマホオジロの繁殖生態について. 高原の自然史, 2:95-99.